

中島 淑子 (Yoshiko NAKASHIMA)

学位：博士（教育）

略歴：名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程前期課程修了

名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程後期課程単位取得満期退学

専門分野：教育方法学

研究課題：1. 小学校算数「量」の学習における操作活動の意義と可能性

2. 自主的な研究サークルにおける教師の学びの成立

3. 子どもの発言に内在する授業諸要因に関する事例研究

【著書】

- ・「小学校『長さの学習』における概念的な理解と操作活動」、的場正美・柴田好章編著『授業研究と授業の創造』（溪水社、2013 年）

【論文】

- ・「問題解決学習における学びの成立について—小学校 3 年総合的な学習『大豆大作戦』の実践を通して—」（『愛知文教大学教育研究』第 15 号、2025 年）
- ・研究ノート『「主体的・対話的で深い学び」とは』（『学び合う学び研究所紀要』第 2 号、2024 年）
- ・「算数の量の学習における教育課程の変遷 — 操作活動の分析を通して —」（『愛知文教大学教育研究』第 12 号、2022 年）
- ・「小学校算数『量』の学習における構成的な操作活動の意義と可能性」、博士学位論文 13901 甲第 12970 号（名古屋大学、2020 年）
- ・“How to Bridge the Gap between National Curriculum and Reality of Classroom: Perspective of Lesson Study for Curriculum Improvement”（共著、“The International Conference on Efficiency and Effectiveness of Educational Service at Mongolian National University of Education (MNUE)”. 2019.)

【学会発表】

- ・「操作活動による概念形成の成立要因 — 算数科『量の学習』を通して —」（日本教育方法学会第58 回大会、山口大学、2022年10月1日・2日）
- ・「角の大きさの学習における量の大きさの理解」（中部教育学会第70回大会、信州大学、2022年7月3日）
- ・「量の指導原理の再検討」（日本教育方法学会第56 回大会、オンライン開催、2020 年10 月10 日・11 日）
- ・“How to Bridge the Gap between National Curriculum and Reality of Classroom: Perspective of Lesson Study for Curriculum Improvement”（柴田好章氏との共同研究、“The International Conference on Efficiency and Effectiveness of Educational Service at Mongolian National University of Education (MNUE)”, モンゴル国立教育大学：ウランバートル市、2019 年）
- ・“Enhancing Lesson Study and Developing Teaching Materials focusing on students learning”（モンゴル授業研究会、モンゴル国立教育大学：ウランバートル市、2017 年）
- ・「算数教育における量学習の変遷」（日本教育方法学会第 3 回大会、千葉大学、2017 年）
- ・“Transition of Misconceptions of the ‘Length’ during math classroom discussion: Merits and Faults of prior knowledge and students’ interaction”（柴田好章氏との共同研究、世界授業研究学会日本大会、名古屋大学：名古屋市、2017 年）
- ・「小学校算数教育における分離量と連続量の統一的指導原理の構築 — 量の動態的認識に基づいて —」（日本教育

方法学会 第 52 回大会、九州大学、2016 年)

- ・「日本の教師たちが学ぶ自主的な研究サークルについて」(世界授業研究学会イギリス大会、エクセター大学：エクセター市、2016 年)

令和 8（2026）年度ティーチングポートフォリオ

氏 名	中島淑子	職位／役職	特任教授／教職課程研究センター長
-----	------	-------	------------------

1. 教育の理念

教職課程の担当として、急激に変化する現代社会を生き抜いていくことのできる教員を育成することを目指している。最近では、一人1台のタブレットを利用した教育が行われるようになり、自分たちが受けてきた教育とは全く異なる変革があった。どのような状況においても対応することができ、社会に貢献できる人材となるには、どのような知識や実践力が必要であるのだろうか。

全てを解決できる回答ではないが、まずは深い教養を身につけさせることである。深い教養とは、知識だけではなく、情報のあふれた現代において、正しい情報を見極める力も含む。そして、得られた情報を解釈して、自分なりの考えをもち、それを土台として学び続けることができる、教員にふさわしい人材を育成する。

深い教養の上に立ち、教員としての実践力を身につけさせることを目標とする。

2. 教育活動の内容

2024 年度

教職概論

道徳教育論

教育方法論

アカデミアゼミ A

教職クラブ顧問

学び合う学び研究所 セミナー講師：論文講座（4月から3月まで、月1回実施）

2025 年度

教職概論

道徳教育論

教育方法論

教育インターンシップ A

介護体験

教職クラブ顧問

学び合う学び研究所 セミナー講師：論文講座（4月から3月まで、月1回実施）

2026 年度

教職概論

道徳教育論

教育方法論

教育研究 B

教育インターンシップ A・B

介護体験

教職クラブ顧問

学び合う学び研究所：論文講座（講師 4月から3月まで、月1回実施）

3. 教育の方法

深い教養を基本として、実践力のある教員の育成をめざす。教育の方法としては、教員としての実践力の育成を目指し、模擬授業、学校体験、話し合い活動等の体験活動を重視する。

教職概論の授業では 10 分、教育方法、道德教育論の授業では 50 分の模擬授業を取り入れている。一人の学生が教師役となり授業を行い、それ以外の学生が生徒役になり、授業を行なう。そのことにより授業を受ける生徒の気持ちを通して、良い授業とは何かを考えることができる。

(1) 1 年 教職概論

1 年生の教職概論では、一人ずつ、5 分程度の模擬授業を行なっている。授業を行う上で大切であると言われる導入の部分を学生が指導を行う。毎年、教えることの難しさを体験できたという感想があり、教職を目指す上では、貴重な学習である。

また、授業の内容では、2022 年度からは、教員に関する法律や待遇についての内容を、学生一人ひとりに課題として与え、それについて発表させる形を行った。そこで、2023 年度では、学生が興味をもった教育に関する課題について調べて発表させる形をとった。学生の選択により偏りを心配したが、教員の多忙化、心を病む教員、不適格教員に対する問題、不登校問題、いじめ問題、外国人の教育問題、教員の給料、画一的で受け身的な教育、教育格差のように、おおむね教職概論として扱うべき内容が網羅された。2026 年度も過年度と同様に、学生一人 1 テーマの発表をするという授業を行う。これらの発表をもとに、資料を提供し、発表内容を深める学習を行う。

(2) 2 年 道德教育論

教育実習では、指導案が作成できている力が求められている。毎年、本授業では、指導案の作成と、一人 45 分ずつの模擬授業を行うようにする。道德の指導案は、発問の作成が難しいが、国語や英語の指導案の作成の一助となることができる。単元構造や、主題設定、発問に力を入れて指導する。

(3) 3 年 教育方法論

2025 年度の 3 年生の教職方法論では、論作文対策を兼ねて、デューイ等、著名な教育関係の書籍の感想文を書かせた。作文には、題名と小見出しをつけることにより、段落意識を高めて、論理的な文章となり、説得力のある文章が執筆できると考えた。

採用試験の対策だけでなく、体験を重視するデューイの思想は、教員としての資質を育てる力になると考える。2026 年度も 2025 年度と同様に、教育の諸問題に対する深い思考と問題解決能力の育成をねらう。

(4) 小学校体験活動

2025 年 9 月 17 日（水）、18 日（木）の二日間、小牧市内の小学校において実施し、第 1 学年の 12 名の学生が体験活動に参加した。参加を通して、教員になりたいという意志を固めた学生がおり、有意義な活動であった。2026 年度は、9 月 9 日（水）、10 日（木）に二日間の小学校体験活動を実施する。

(5) 文教子どもフェスタ in 小牧

2025 年度の「文教子どもフェスタ in 小牧」は、大学祭との合同開催であった。近隣の幼児や小学生、保護者 84 名が集まり、遊びのコーナーを楽しんだ。幼児や小学生との触れ合いを通して、教員としての意欲を高めることができた。2026 年度は、11 月 21 日（土）に実施する。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

授業評価では、模擬授業を行うことにより、授業の難しさが分かること、分かりやすい発問について考えさせられたという感想が多かった。また、課題について学生が発表するという学習により、様々な

ことが学べたという感想があった。そして、グループでさまざまな課題について話し合うことにより、一人一人異なる考えを持っていることが分かり、自分の考えを深めることができたという感想があった。

5. 今後の目標

講義形式に対しては、あまり良い評価がなく、発表や、グループでの話し合いの形式が高評価であった。学生が主体的に活動する学習を、より発展させていく。

課題としては、教育史等の知識注入学習となりがちな学習において、学生が主体的に学習に取り組むことができるような指導としたい。